

ブラジルにおける 赤嶺ウトの生活

ブラジルでは、多くの親戚や友人等が集まり、ウトを迎える盛大なパーティーが開かれた。
ウトはブラジル生まれの9人の孫や数人のひ孫に会い、一緒に過ごすことが出来た。
また、戦前にブラジルへ移民した姉妹たちにも頻繁に会った。

16



三郎の兄弟 2人がブラ ジルへ渡航

ウトに続き、弟の徳とその家族
が1956年にブラジルへ移民した。

そして1962年、三郎の唯一の妹
美代子も家族とともに、ブラジルの
赤嶺家に合流した。

1956

弟
赤嶺徳の移民
1956
8



旅行証明書 - 琉球列島 米国民政府発行
1955年10月12日

徳

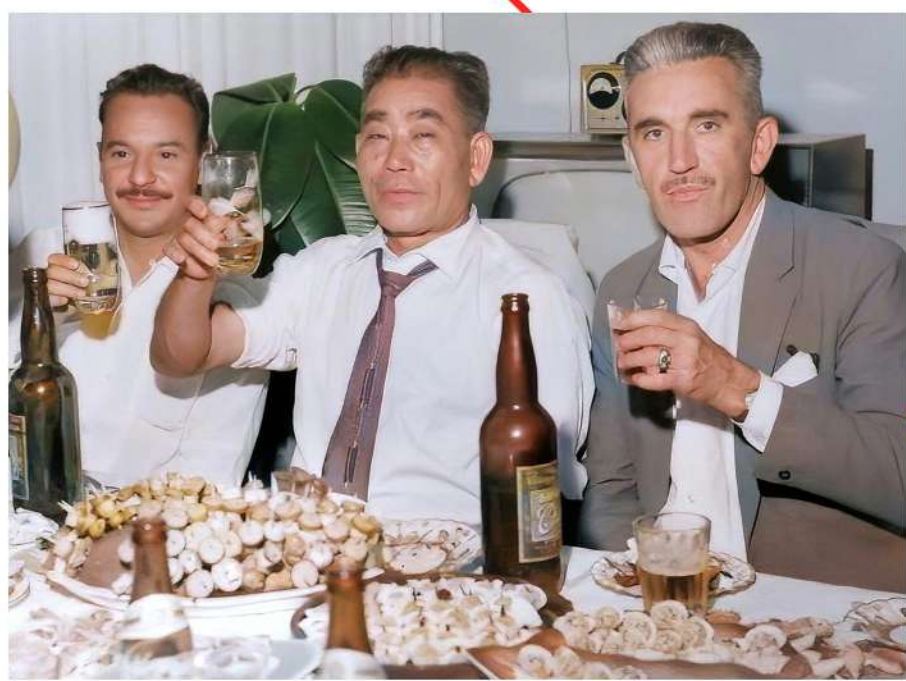
1962

与儀清福さん一家の渡伯送別記念 1962.11.24



妹
与儀美代子の移民
1962
8

美代子



18



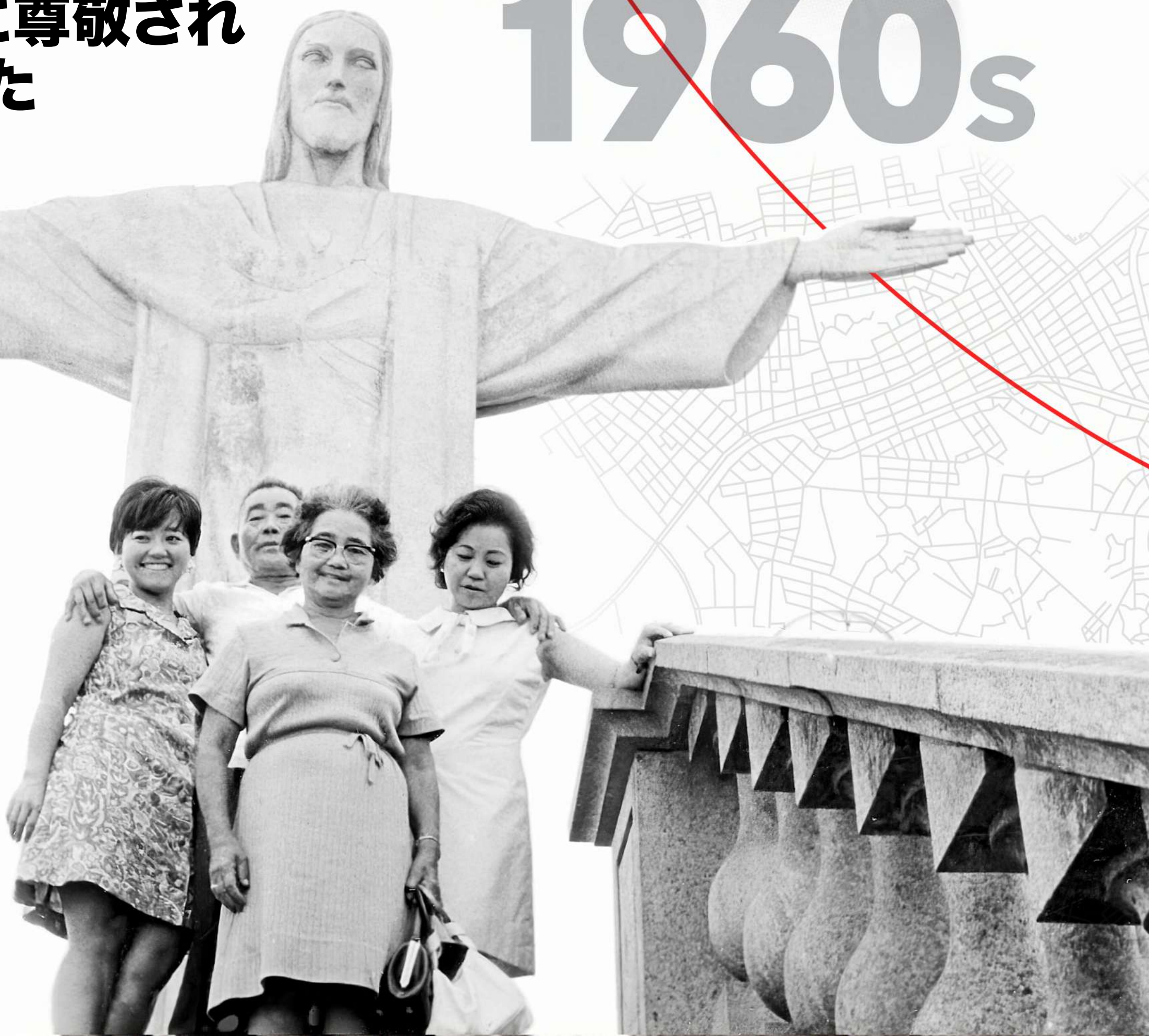
三郎はリオ・クラーク社会 に貢献し、人々に尊敬され る実業家となった

1960s

顧客のために常に新しいものを導入していた三郎のイノベーションと起業家精神を、リオ・クラーク社会は評価した。同時に、三郎は正義感に満ちた一社会人、家庭の大黒柱、そして一市民として知られるようになる。

三郎は慈善団体に加わり、困っている人達を支援するために食料や冬着、資金を集めるキャンペーン等を家族総出で行った。

彼はさらに、孤児や捨て子を収容する施設「カザ・ダス・クリアンサス・デ・リオ・クラーク（リオ・クラークの子供の家）」の所長にも就任し、自身の子供たちと施設の子供たちをよく遊ばせた。



リオ・クラーク の名所となった 「ヘスタウランチ・ アカミーネ」

19

「日本人オーナーのバー」として親しまれていたバー
ル・エ・カフェ・アカミーネの成功を受け、三郎はさらなる
挑戦を決意。

1962年、リオ・クラーク市中心部のメインストリートに
「ヘスタウランチ・アカミーネ（レストラン赤嶺）」を開店
する。この事業の成功により、赤嶺家は今でもリオ・クラ
ークで知られている。三郎は、当時まだ珍しかったエアコンを
店に導入した。

ヘスタウランチ・アカミーネ
(レストラン赤嶺)



レストラン赤嶺開店
1962





1964

赤嶺ウトの逝去

1964年1月26日、長い闘病生活の末、赤嶺ウトが83歳で亡くなり三郎と家族にとって大きな悲しみとなった。

20





21

息子 オズワルドが、
ブラジル・赤嶺家を
代表して、はじめて
祖先の地を踏む。

1966

1966年、医学部を卒業したばかりの三郎の三男オズワルドは、2年間日本へ留学することになる。三郎がブラジルに到着して約50年後、ブラジル・赤嶺家の一員が初めて移民とは逆方向に、ブラジルから沖縄に渡航したのだった。

オズワルドは叔父や従兄弟たちに温かく迎えられた。祖父 牛の12番目の息子という意味で「十二男」と呼ばれるほど叔父たちと仲良くなり、それを誇りにしていた。更にハワイまで足を延ばし、祖母方の親戚である金城家とも交流した。

オズワルドが
1966
とハワイを訪問



息子 オズワルド が沖縄とハワイ の親戚を訪ねる

22

ハワイ



沖縄

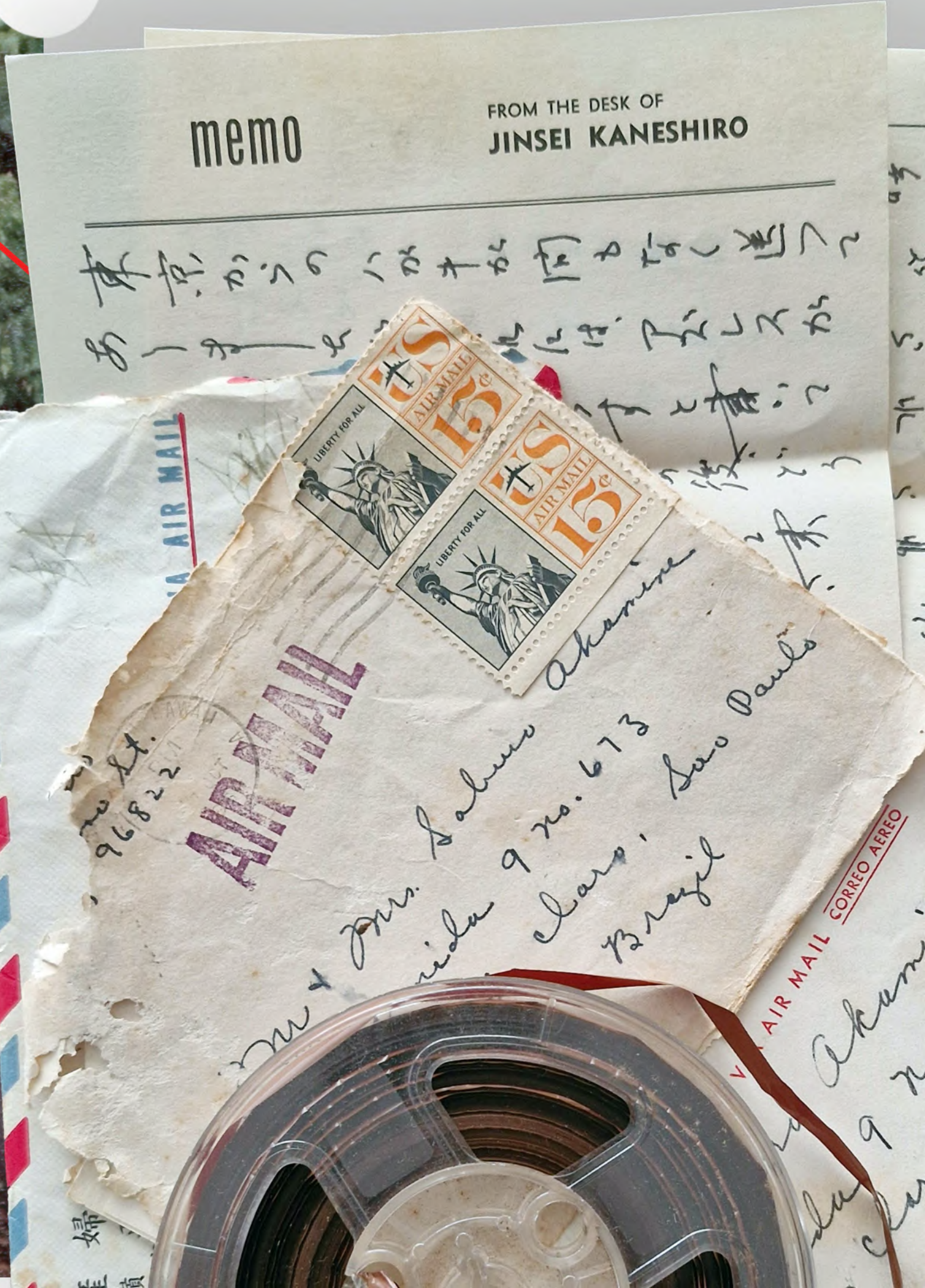


オズワルドの訪問を ぎっかけに国境を越 えた家族間の連絡が 活発になる。 親戚は三郎との再会 を希望。

親族間で非常に活発な交流が始まった。赤嶺オズワルドは、ブラジル、沖縄、ハワイをつなぐ新たな架け橋となることに成功した。彼は皆に頻繁な連絡を勧め、オーディオレコーダーという新しいツールを導入した。録音された音声は、ブラジルから沖縄へ、そしてまた沖縄からブラジルへと送られた。

ブラジルと沖縄の親族間で頻繁に話題にあがったのが、三郎の沖縄訪問だった。三郎の弟たちは、兄との再会を強く求めた。ブラジル国外にいたオズワルドは、高額な費用がかかることを理解しながらも、父の沖縄訪問の重要性をブラジルの親族に説明するために動き出した。

23



1970



24

三郎 53年ぶりに 故郷沖縄へ

1970年、オズワルドがブラジルに戻り、レストラン赤嶺が繁盛するなか、赤嶺家は三郎の健康状態が気になりだした。以前から動脈硬化を抱えていたところ、今度は肺に腫瘍が見つかったからである。さらに、心臓発作もあり、三郎も、自身がもう長くはないことを悟った。これを機に、三郎は53年ぶりに故郷を訪問することを家族に伝え、同年、妻マウシとともに沖縄へ帰郷した。



三郎とマウシが
沖縄へ行く
1970

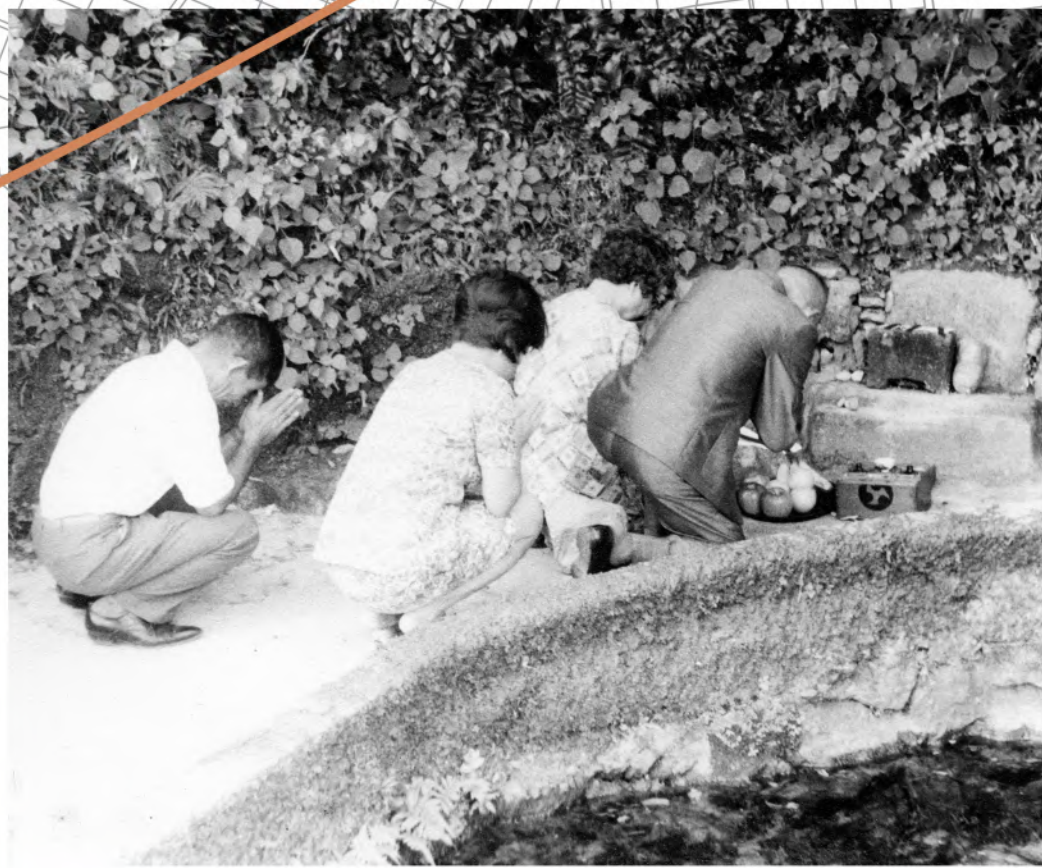






26

三郎は故郷で、ゆかりのある歴史的な場所を巡り、親族に会い、それまでの人生を振り返った。





1971

沖縄訪問からちょうど1年後、 66歳で息を引き取る

沖縄訪問から1年後の1971年9月8日、三郎は66歳で息を引き取った。
遺体は盛大な葬列に伴われ、市営墓地まで見送られた。
ブラジル各地から親戚や友人等も駆けつけ、三郎との別れを惜しんだ。

27



リオ・クラー口の通りの一つが 「Avenida Saburo Akamine」と名付けられた

1996年9月13日、リオ・クラー口市長は、市議会が全会一致で可決した法案を承認し、バトヴィ市道は「アベニータ・サブロー・アカミーネ（赤嶺三郎大通り）」と名を改められた。

それは、三郎が地域の商業および社会の発展に貢献したことへのリオ・クラー口市からの謝意であり、「アベニータ・サブロー・アカミーネ」は、強靱な精神力を持ち、困難を克服し、成功を収めた日本・沖縄移民の一つの足跡が一つの形となったものであった。

**Avenida
Saburo Akamine**



2001年、リオ・クラー口市長は「アベニータ・サブロー・アカミーネ」の開通式を行った

LEI Nº 2839

de 13.09.96

(Projeto de Lei nº 57/96 de autoria do Vereador Octávio José Chiossi).

Denomina de Avenida SABURO AKAMINE a Estrada Municipal de Batovi deste Município.

Eu, DERMEVAL DA FONSECA NEVOEIRO JÚNIOR, Prefeito do Município de Rio Claro, Estado de São Paulo, usando das atribuições que a Lei me confere, faço saber que a Câmara Municipal de Rio Claro aprovou e eu promulgo a seguinte Lei:-

Artigo 1º - Fica denominada de SABURO AKAMINE a Estrada Municipal de Batovi, a partir da Rua 13 até o seu final, neste Município de Rio Claro.

Artigo 2º - Esta Lei entrará em vigor na data de sua publicação.

Rio Claro, 13 de setembro de 1996
DERMEVAL DA FONSECA NEVOEIRO JÚNIOR
Prefeito Municipal
Publicada na Prefeitura Municipal de Rio Claro, na mesma data supra.

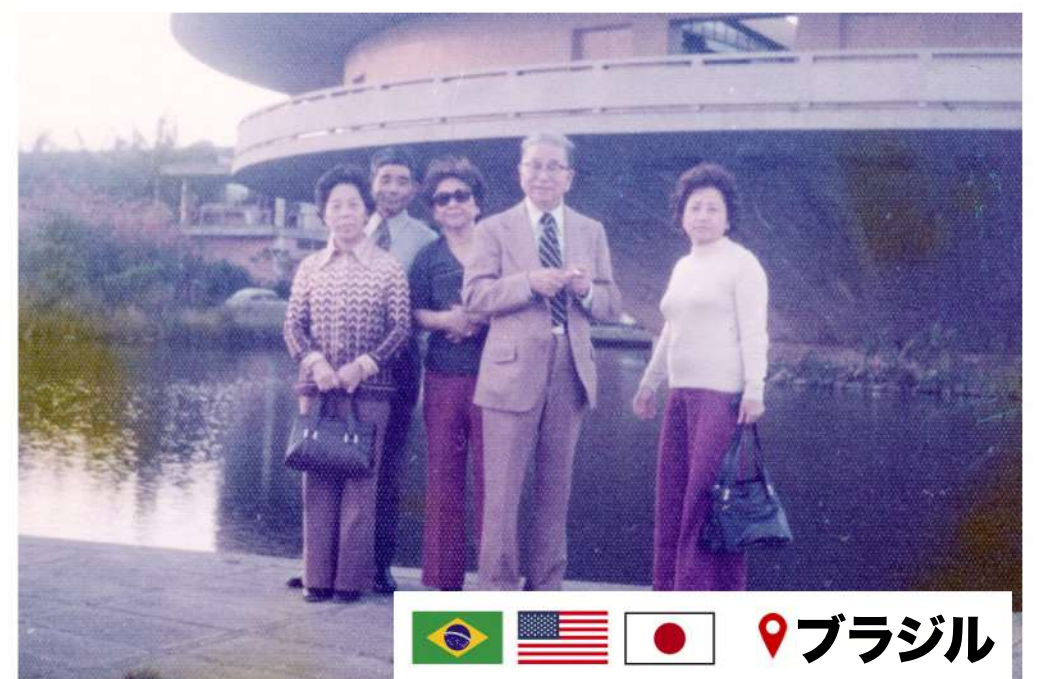
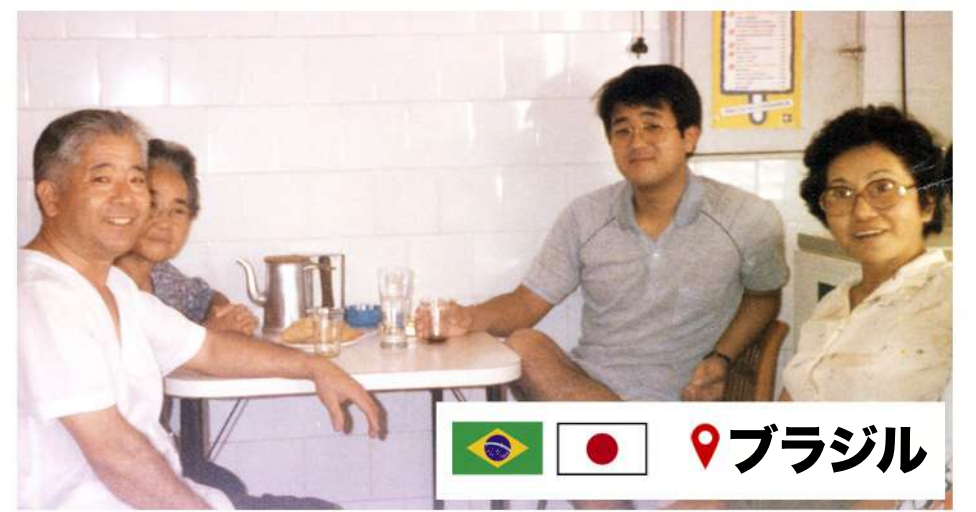
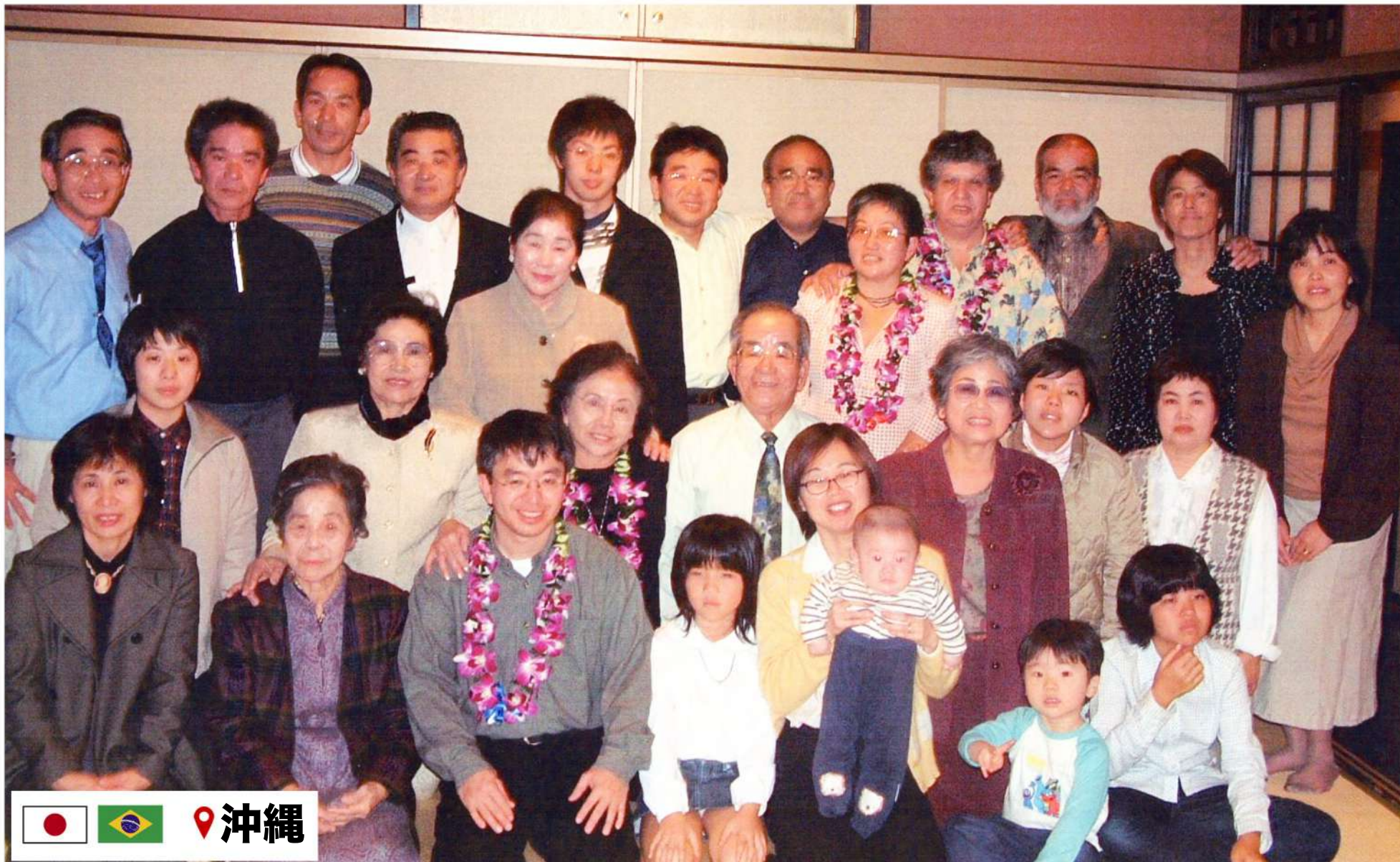
CÉLIO JOSÉ ESCHER
Secretário Municipal de Administração

1996年 アベニータ・サブロー・アカミーネ（赤嶺三郎大通り）を承認した法案

1976年以降、国境を越えた家族の訪問が行われるようになった

三郎の死後も、ブラジル・ハワイ・沖縄の親戚同士で集まることはあったが、高齢化が進むにつれ、若い世代のつながりが薄くなり、絆が失われるのではないかと懸念が生まれ始めた。

国境を越えた家族の今の目標の一つは、新たなつながりを築きつつ、これまでの絆をより強固にし、継続することである。





  📍 **ブラジル**



  📍 **ブラジル**



  📍 **ブラジル**



  📍 **ブラジル**



  📍 **沖縄**



  📍 **ブラジル**



  📍 **沖縄**



  📍 **日本**



  📍 **沖縄**



  📍 **沖縄**

忘れてはならない歴史

家族の歴史を掘り起こし、ルーツを調べることは、単なる趣味や好奇心以上の意味がある。先祖が歩んだ道のりを知ると、今の快適な生活は、彼らの努力と苦難の上に築かれたものであるのだと感動せずにはいられない。私たちにできるせめてもの恩返しは、先祖の人となりと歩みを知り、決して忘れないことである。

私たちは先祖の命を受け継いでおり、家族の歴史を守るという大きな責任がある。移民として異国の地に立ち、子どもたちと離れ離れになった親の気持ち、戦争で全てを失った家族の苦しみを理解することが重要である。彼らが持ち前の回復力を発揮し、再起し、成功を収めたからこそ、私たちは今ここにいるのだ。

これらの歴史を忘れないことは、感謝を示すだけでなく、自分自身を知るための行為でもある。家族の過去を知ることは、今の自分たちの立場を理解し、どのようにしてここまで来たのか、そしてこれからどこへ向かうべきかを考えるきっかけとなる。それは、自分たちがより大きな何かに属しているという意識を持つこと、それが安心感と誇りの源であることを意味する。同時に私たちは、その歴史を尊重し、未来の世代に守り伝える責任をも担っている。結局、私たちもいつかは歴史の一部となり、その歴史が次の世代にとっての安心感の源となるのである。



ファビオ赤嶺について

ファビオ・赤嶺は、ブラジルの赤嶺家の三世、三郎の孫にあたり、オズワルドの次男である。社会コミュニケーション学科を卒業し、グラフィックデザイナーとして働く傍ら、余暇には赤嶺家の歴史資料の研究、整理、保存につとめている。

2017年、祖父 赤嶺三郎のブラジル到着 100周年を記念し、赤嶺三郎の子供たちの家族の略歴と家系図を記した『赤嶺三郎一大家族系図』(日本版あり)※1を執筆した。

2022年には、『Agijabiyo!』(ポルトガル語)※1と題する書籍を出版。そこで家族の歴史を掘り起こすプロジェクトをどのように始めたかを語っている。この作品の出版以来、家系学、ルーツを調べることや沖縄の伝統に関する講演を行っている。

ファビオは 90 年代から曾祖父母である赤嶺牛とウトの位牌を守っている。祖父 三郎の位牌は 2023 年、まだ幼いファビオの次男 マテウスに託された。現在、2 つの位牌は同じ仏壇の中で隣り合っており、同じ家族によって大切に守られている。



ブラジルの赤嶺家について

現在、ブラジルの赤嶺家は第五世代目が生まれている。三郎の妻 マウシは、80歳の誕生日を祝う盛大なパーティーの数か月後、1988年に亡くなった。三郎・マウシ夫妻の9人の子供たちのうち、三女 チルセのみが健在である。孫は19人、曾孫は27人、玄孫が2人いる。ヘスタウランチ・アカミーネ（レストラン赤嶺）は二男 シゲオ（故人）の妻 テルコと息子のプレーノが切盛りしている。

赤嶺家の大半はリオ・クラークを出ているが、毎年クリスマスを祝うために集まっている。これは、三郎が始めた習慣である。

謝辞

ブラジル・赤嶺家
沖縄・赤嶺家
ハワイ・金城家
ビビアーニ・ウエハラ氏
マリーザ・ベントゥローリ氏
ノリコ・イマムラ氏
ダニーロ・ペローソ氏
リオ・クラーク市立公文書館
清太鼓（ブラジル国リオ・クラーク）
いけばな山月（ブラジル国リオ・クラーク）

協力

パネル／文章：ファビオ・赤嶺
制作：ファビオ・赤嶺、沖縄県立図書館
資料：赤嶺家資料
移民船「河内丸」の写真：ブラジル日本移民史料館
翻訳：タカオ・マエダ、沖縄県立図書館
撮影／編集：マルセーロ・パゴート、ペードロ・ノーブレガ
音声：KK Akamine
音楽：マルー・ヒジ・ナカンダカレ

後援

リオ・クラーク市（ブラジル）
那覇市
ブラジル字大嶺自治会
日伯慈善文化協会（リオ・クラーク）
ブラジル沖縄文化センター
ブラジル沖縄県人会

参考文献

シルビオ・デ・ソウザ著「Um Okinawano em Rio Claro」
（意訳：リオ・クラークのとあるウチナーンチュ）
ファビオ・赤嶺著「Agijabiyo! - Do punk rock ao minyo, Resgatando histórias da família」
（意訳：あぎじゃびよー！パンク・ロックから民謡への移り変わりー家族史を掘り起こして）

これは2024年11月16日、カザロン・ダ・クルトゥーラ（文化の館）でのオープニングの様子である。

